

胆嚢癌との鑑別に苦慮した多血性胆嚢隆起性病変の一例

◎佐野 友亮¹⁾、刑部 恵介²⁾、杉山 博子¹⁾、鈴木 雅大¹⁾、安井 駿豊¹⁾、小林 晟奈¹⁾、杉本 邦彦¹⁾、藤田 孝¹⁾
藤田医科大学病院 臨床検査部¹⁾、藤田医科大学 医療科学部²⁾

【背景】胆嚢ポリープは胆嚢粘膜面に認められる20mm以下の有茎性の隆起性病変の総称である。鑑別診断には経腹壁超音波検査（TUS）や超音波内視鏡検査（EUS）等の画像検査が有用とされているが、鑑別困難な症例も存在する。今回、胆嚢癌との鑑別に苦慮した胆嚢隆起性病変の一例を経験したので報告する。

【症例】30代、女性。寛解バセドウ病経過観察中。血液検査にて肝酵素の軽度上昇を認めたため腹部エコーを施行したところ、胆嚢底部に隆起性病変を認めた。

【検査所見】TUSにて胆嚢底部に14×9mmの有茎性隆起性病変を認めた。ドプラでは壁内から流入する比較的太い線状の血流表示を認め、高精細ドプラ（DFI）では隆起内で線状に分岐する血流表示を認めた。最高流速値は隆起内で66.3cm/sと高速であったものの、胆嚢壁では28.1cm/sであった。血管抵抗指数は隆起内でPI:0.572、RI:0.430、胆嚢壁でPI:0.894、RI:0.596と低かった。また、胆嚢壁は全周性に軽度肥厚を認めた。

EUSでは胆嚢底部に13mm大の有茎性隆起性病変を認め、内

部に高エコーspotを認めた。なお、胆嚢壁からの血流が1本描出された。

造影CTでは胆嚢底部に18×13×13mmの乳頭型の病変を認め、胆嚢壁の造影は軽度増強効果を呈した。また、栄養血管のサイズが太く悪性腫瘍の可能性が疑われた。

以上より乳頭型の胆嚢癌が疑われ、腹腔鏡下胆嚢切除術が施行された。

【結果】病理組織所見では、病変の表面は過形成変化を伴う異型に乏しい胆嚢固有上皮に覆われ、粘膜固有層の一部では泡沫細胞が多数集簇しており、Cholesterol polyp with epithelial hyperplasiaと診断された。また、リンパ球、形質細胞を主体とする炎症細胞浸潤、出血、浮腫、うっ血を伴っていた。

【まとめ】今回の症例は14mm程度と比較的サイズが大きく血流も豊富であったが、胆嚢癌と比較して血流パターンが異なる点、血管抵抗指数が低い点が鑑別のポイントとなるのではないかと推察された。

連絡先：0562-93-2203